
古典の恋 その二

橙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

古典の恋 その二

【Nコード】

N3478M

【作者名】

橙

【あらすじ】

古典の苦手な朝子は、疎遠になっていた幼馴染と、ふとしたことから関わるようになりました。

やはり古典作品には関係ありません。

幼馴染と妄想と、恋のお話。

「お願い、朝子ちゃん。」

結ちゃんも切実です、という表情であたしを見上げた。本当に困っている様子で、眉を八の字にし、目もかすかにうるんでいる。小柄でかわいい子の上目づかいて、反則だ。良心と庇護欲が刺激されていけない。

「うーん……。」

まいった、どうしよう。

6月も既に、ラスト3分の1にさしかかった。日に日に気温は高くなっていき、蒸し暑さが増していく。雨ばかりというわけではないけれど、まだ梅雨は明け切っていない。そんな梅雨でも、晴れ間の日差しはもはや夏。ぎらぎらと狂暴さを帯びてきた。

昼休みだというのに、あたしは弁当もそこに切り上げ、生徒会室に詰めている。期末試験前の定例議会が迫っていて、庶務雑務がどっさりあるのだ。各委員会や各クラス委員への連絡と確認。書類のまとめと、大量のコピー。役員の打ち合わせや、ひとつ走りして先生にハンコをもらってくるなどなど。

最近は昼休みも返上だけど、あたしだけじゃなく他の役員の皆も忙しく働いているから、文句は言えない。たとえ、議会と一緒に迫ってきている期末試験が、非常に気になっているとしてもね。その辺は、皆だって同じなのだ。

あたしは今度の議長も交えた打ち合わせに備えて、今までに提出された議題をまとめていた。生徒会の備品である古い型のパソコンにカタカタ打ち込んでいると、後ろから遠慮がちに声をかけられた。「あの、朝子ちゃん。ちょっといいかな……?」

振り返ると、美化委員長の河内結ちゃんだった。

「あれ、どうかした？」

美化委員会に関する連絡・確認事項は、もう既に全て済ませてあるはずだ。何か他にあったかな、と思つて尋ねると、結ちゃんは首を振った。

「ううん。あのね、実はお願いがあつて。」

あたしは結ちゃんに、近くに放置してあつた椅子をすすめた。ぼろぼろの、いつ廃棄されてもおかしくない椅子だ。かなり申し訳ないけれど、この生徒会室にあるのはどれも似たようなものだから、どうしようもない。

結ちゃんはぎいぎい鳴ってしまうその椅子にちょこんと腰かけ、こくつとつばを飲み込んでから言つた。

「あのね、美化委員会の活動計画書のことなんだけど……。」

ああ、とあたしは思い当たつた。そういえば、美化委員会はまだ未提出だった。いつも事務系の仕事はそつなくこなして問題のない委員会だから、今回ちよつと遅れていてどうしたんだろう、とこの前の打ち合わせで会長が言っていたっけ。

「計画書、できた？」

あたしが尋ねると、結ちゃんはしゅんと目を伏せた。

「それが、まだなんだ。計画書の作成をしている人がいるんだけど、何の連絡もなくて、まだできていないみたいなの。それで、今から急かしに行こうと思うんだけど……。」

ちらり、と結ちゃんは上目づかいにこちらを見た。

「朝子ちゃん、一緒に来てくれない？」

「え、いいけど……。」

なんだそんなことか、とあたしは拍子抜けした。一人で行くのが嫌なのかな、となんとなく苦笑してしまう。

「その、計画書作つてる子って、誰なの？」

結ちゃんの表情が暗くなった。小声で、ぼつんと言う。

「8組の、野球部の新田くん。」

耳を疑った。

「え。」

予想だにしなかった人の名前が出て、あたしは絶句した。結ちゃん
は泣き出さんばかりに必死になつて言う。

「お願い、朝子ちゃん。わたし、あの人　　すつごく怖い。いつ
も不機嫌そうっていうか、威圧感あるし、ほとんど話したこともな
くて。」

「ああ、……うん。」

呆然として、曖昧な反応を返してしまった。

確かに、彼は結ちゃんみたいな小柄な子から見ると、すごく怖い
だろう。あたしは、彼の上背のあるがっしりした体を思い浮かべた。
愛想のない、ふてくされているように見える顔。あまりしゃべらな
いし、ちよつと怖いのはわかる。あの強面は評判のようだし。

うーん。

あたしはちら、とパソコンの画面に目をやった。

「……誰か、他に行ってくれそうな人はいなかった？」

それとなく、仕事を楯にずるく逃げようとしたあたしに、結ちや
んは身乗りだした。

「委員会の子は皆怖いって。　　朝子ちゃんなら、あの人のことも
怖くなさそうだし、気軽に話し掛けられるんじゃないかと思つて。」

そうだ。確かに、あたしは彼のことが怖いわけじゃない。怖いわ
けじゃないけれど。

どうしよう、と迷っていると、向かいの机の雑然と積まれたファ
イルの向こうから、笑いをこらえる声が聞こえた。顔を向けると、
黒ぶち眼鏡の奥の、明らかにおもしろがっている目と視線がぶつか
った。

「何？」

ちよつとムツとして問いかけると、相手はにやにや笑いを返して

きた。

「いやいや。当然、藤原には新田なぞ恐るるに足らねーよなと思つて。」

「どういう意味、それ。」

相手はすまして眼鏡を上げた。

「朝子姐さんにや、新田の威圧感もそよ風みたいなモンだろ？」

「って、怒るなよ。これ、僕じゃなくて河内が言っただぞ。」

「わたし、そんなこと言つてないよ、会長。」

結ちゃんは苦笑した。あたしは、呆れてため息をついた。

このひょうきんな黒ぶち眼鏡が、我らが生徒会長、吉田信広会長だ。いちいち話に入つてこないでよ。そう言おうとして、あたしははつと気づいた。

「そうだ ノブ会長、あんた8組じゃんか！」

会長が結ちゃんと一緒に行けば、ちょうどいい。最良の案をひらめいたあたしに、ダメダメ、とノブ会長は手を振った。

「僕は藤原と違って繊細だから、新田の前なんか出たら気絶しちゃうよ。同じクラスだけど、僕もあんまり話さないし。」

こいつはー。あたしは脱力して息をはいた。結ちゃんはくすくす笑っている。

ノブ会長はちら、と自分の腕時計を見た。

「ぐずぐずしてると昼休み終わっちゃうぞ。議題まとめは後で誰かに投げておくから、さっさと行つておいで。」

あたしは再びため息をついて、のろろ席を立つた。行くしかないのか。正直、気分が重い。結ちゃんもぱつと顔を輝かせて立ち上がった。

あんまり話さない、だって。それを行かない理由にしていいいなら、あたしだって、彼とは全く話さないのに。

8組の扉の前で、結ちゃんは顔をこわばらせ、ぎゅっと手を握りしめていた。かなり緊張しているようだ。大丈夫かな。あたしは不安に思いつつも、近くにいた人に件の彼を呼んでもらうよう頼んだ。あたしはただのつきそい。話すのは結ちゃんね。ここへくる道で、そう取り決めた。結ちゃんはこくと頷いてくれたけれど。震えるくらい緊張していて、ちゃんとしゃべれるかな。しかも、計画書を早く上げるように急かすなんてこと、できるだろうか。そういうものは、ある程度きっぱりと強く言わないといけないことだ。ほどなく、ぬっと大きな体がこちらへ近づいてきた。彼だ。眉間にしわを寄せて、不機嫌そうな顔であたしたちを見下ろしてくる。

「何。」

出てきた声はむっつりと低い。隣の結ちゃんの肩がぴくんと動いたのがわかった。

「……………」

凍ったまま、誰も言葉を発しない。結ちゃんは青くなっていて、彼は威圧感、あたしは宙ぶらりん。奇妙な空間だ。

この動かない場をどう思ったのか、彼の眉間のしわがさらにぐつと深まった。目つきが険しくなる。それを見た結ちゃんがさらに青ざめる。埒があかないので、当初の予定を変えてあたしがしゃべることにした。

「あのさ、美化委員会の計画書のことなんだけど……………」

ちら、と彼の目がこちらを向いた。

怖くはない。けれど 緊張は、する。

「進み具合、どう？期限すぎているし、なるべく早めに、議会までには提出してほしいんだけど。」

彼はじいっとこちらを見る。……睨んでいるのではないと信じた
い。

「……わかった。」

表情は変わらなかったが、彼は頷いてくれた。
きちんと反応が返ってきた。そのことに、あたしは自分でも思い
がけないほど、心からほっとした。よかった。

また、何にも言うてくれなかったらどうしようかと。

「うん。わからないことがあったら、結ちゃんとかあたしに聞いて
くれればいいから。8組には、ノブ会長もいるし。」

彼は顎をくつと引いてまた軽く頷くと、結ちゃんの方を見た。

「……なんで、河内が言わないんだ？」

それは、彼の純粋な疑問だったのかもしれないけれど、あまりに
声が低かったからか、結ちゃんにはそうは聞こえなかったらしい。
結ちゃんは突然彼から注意を向けられて、びくんと大きく肩を揺ら
した後、今度は真っ赤になった。泣きそうだ。

瞬時にまずいと悟ったあたしは、撤回を決めた。

「ま、ま、そういうことで。よろしくね！」

やや引きつり気味の笑いでごまかし、結ちゃんの手を取って逃げ
るようにその場を後にした。彼には、何だかよくわからなかったに
違いない。

廊下を歩きながら、あたしはふうつと息をついた。変に疲れてし
まった。

窓の外は快晴で、白い雲が眩しい。日向に出たら暑そうだ。なん
となくそれを眺めて、あたしはぼんやりと思った。

彼と話したのは、何年ぶりなのだろう。

結ちゃんとは、そのままあたしの教室の前で別れた。彼から離れ

ると結ちゃんはいぶ落ち着いて、最後にはありがとうと言ってくれた。

昼休みはもうほとんど残っていない。あたしはやるせない思いで、途中だった弁当の残りをあきらめた。次の休み時間に急いで食べよう。

自分の席に座り、コンコルドを外して前髪をかきあげる。うすく、額に汗をかいていた。ピンクやオレンジの花のついた、ラメ入りのコンコルドをいじりながら、あたしはゆるゆると息をはいた。

彼 新田勇くとあたしは、幼なじみだ。

小学校も中学校も、そして高校も、ずっと一緒。家も比較的近所だし、親同士のつきあいもある。

けれど、この高校にいる人で、あたしと彼が幼なじみだと知っている人はいないだろう。たぶん、一緒の中学からこの学校へ来た友達ですら知らない。あたしも、あえて友達に話したことはない。

現在、あたしと彼は交流がほぼ断絶状態だ。

小学生の頃は、あたしたちはものすごく仲が良かったと思う。互いの家を行き来したり、一緒に公園に行ったりゲームをしたり、二人してよく遊んだ。家族ぐるみで、海に行ったりバーベキューをしたこともある。彼はあたしの弟とも仲が良かった。彼はあたしのことを朝子、と呼んで、あたしは彼をゆうくん、と呼んでいた。けれど中学に入ってから、あたしたちはいきなり疎遠になったのだ。

何故なのか、あたしにはわからない。ゆうくんはあたしに近寄らなくなった。話しかけてこなくなった。近くにいても、気づかないふりをするようになった。

当時のあたしにとって、それは相当のショックだった。……一度、

中学校であたしから話しかけてみたことがある。避けられていても、あたしはゆーくんとは変わらず友達だと信じていたのだ。遠くなってしまうたのは何か理由があつて、それはあたしがちゃんと直せば元通りになる一時的なことだ、と。

でも、ゆーくんは声をかけたあたしを無視しようとした。無視できないとわかると、ひどく面倒くさそうな対応しかなかった。さつさと終わらせたい、あたしとはしゃべりたくない、という顔をしないで。

そのことで、あたしは結構傷ついたのだ。以来、あたしもゆーくんにはあまり近づかなくなった。近寄っただけで、また嫌な顔をされるのはたまらなかった。仲良しだったことを、なかったことにされているように感じるから。

そして全然しゃべらなくなつて、現在にいたっている。

仲の良かった小学校時代、疎遠になつた中学時代。そして、今日すぐく久しぶりにゆーくんと話した。彼はそっけなかったけれど、あからさまに嫌そうな顔をすることなく、ちゃんと反応を返してくれた。

これは、どういうことなんだろう。今、彼の中であたしはどんな位置にいるのだろう。幼なじみ？昔の友達？関わりたくない奴？それとも、全然知らない人？

あたしにはもうわからない。あたしの中で、彼はどんな位置なのか。友達、だと思つてもいいのだろうか。ゆーくん、と呼んでもいいのだろうか。

もう関わることはないだろうと思つていた。けれど今日、彼と少しだけだけ関わった。これは、この高校時代にあたしたちの間の何かが変わってくれる、ということになるのだろうか。

そうであればいいのに。

二度目の接触は、思いがけないほど早くやってきた。

結ちゃんと一緒に彼を訪ねた2日後、彼自身が授業後の生徒会室にやって来たのだ。

あたしは議会準備の大詰めを迎え、今日で全て終わらせてやる用意気込んで、パソコンの画面に集中していた。戸口のところに立っていた彼を最初にみつけたのは、ノブ会長だった。

「新田じゃねえか。何だ、どうした。」

「ああ。」

びつくりして、あたしは勢いよく入り口の方を向いた。彼がいた。

この扉は「開放的な生徒会」というスローガン通りに、常に開きっぱなしだ。あたしには、そのドア枠がこんなに狭そうに見えたことはない。昔よりもすごく大きくなったんだあと、今さら改めて思った。昔は、あたしとそう変わらない背丈だったのに。

彼は生徒会室の中を見回して、ぽかんとしているあたしに目をとめた。戸口をくぐって近づいてくる。

「これ。」

ぴら、と彼は一枚の紙を渡してきた。美化委員会の活動計画書だ。もうできたの？」

驚いて思わずそう聞くと、彼は頷いた。

「粗方はできてたから。こんなんでもいいか、見て欲しいんだけど。」

「うん。」

あたしは紙を受け取って、目を通し始めた。なんとなく隣の彼が気になって書類に集中できなかったけれど、どうにか最後まで読み通す。うん、大体OKだ。

「あとちよっと手直しして欲しいところがあるけど、大すじはこれでいいと思うよ。」

「わかった。」

言ってから、ふと気づいた。

「ていうか、あたしよりも結ちゃんに見せた方がいいんじゃない？」

彼はぐつと眉根を寄せた。コワイ顔。

「……河内だと話が進まない。」

苦々しい言葉に、あたしは思わず吹き出した。彼はますますムスツとした表情になる。

なんとか必死で笑いを押さえ込んで、あたしは彼に訂正箇所を言った。ここをもう少し具体的に説明して欲しいとか、こんな言葉を使ったらいいんじゃないかと。彼は頷いて、明日にはまた訂正したものを持ってくると言った。

用事が終わって、彼はそのまま生徒会室を出て行こうとする。彼が戸口にさしかかった時、あたしはあつと思いついた。そういえば、戸棚の中に昨年度の計画書があつた気がする。渡せば参考になるかもしれない。

ゆーくん。

そう彼を呼びとめかけて、あたしは慌ててその言葉を飲み込んだ。

「新田くん。」

初めて、彼のことをそう呼んだ。違和感で、舌がしびれたようになる。違う人と呼んだみたいだ。けれど彼 新田くん、は振り向いた。

あたしは急いで棚をひつかき回し、去年の美化委員会計画書を引っ張り出した。それを新田くんに手渡す。

「これ、去年のやつ。参考になると思うから。」

「ああ。」

ぱつとその紙を受け取ると、新田くんは歩き去っていった。それを見送り、あたしは肩の力を抜いた。

新田くん、新田くんか。この呼び方に、早く慣れないといけない。やっぱり、何年もずっと関わりがなかったあたしが「ゆーくん」

と呼ぶのは変だろう。その方が不自然で、違和感があるだろう。
それは当然のことだ。けれども、ほんの少しだけ寂しく思った。

新田くんがいなくなった後、あたしは準備作業を再開しようとパソコンの前に戻った。やれやれ、と軽く伸びをしていると、ノブ会長がふらふら近寄ってきてあたしの隣に座った。

「藤原、新田と仲いいんだな。」

あたしは、まじまじと会長の顔を見た。彼は意外そうな、おもしろそうな表情をして見つめ返す。さっきのやりとりのどこを見て、このメガネはそんなこと思ったんだろう。

「……別に、そんなによくはないと思うけど。そう見えた？」

「見えた。僕、新田があんなにしゃべっているところ、初めて見たぞ。」

そうなのか。新田くんはあれで、よくしゃべっていたのか。
思わずあたしがうとうむとうなると、ノブ会長はいきなりおかしように、肩を震わせて笑いだした。

「しかし、新田が美化委員って……やっぱり何か似合わねえな。」
それには、あたしも笑ってしまった。そういえば、確かに。彼は元々生徒会活動という柄じゃなさそうなのに、しかも美化委員とは正直、ごみの分別指導とかしている姿があまり想像つかない。

「まあ、あれで案外掃除とか好きなタイプなのかもしれんが。」

「それは、ないと思うけど。」

昔の彼を思い出しつつ、あたしが笑いながら言うと、ノブ会長はひょいと軽く眉を持ち上げた。

「そうか？　なんだ、やっぱり仲いいじゃないか。」

あたしは、肩をすくめるだけにした。もうこの話題はおしまいにしよう。

「それより会長。あたし、明日生徒会に来ないから。」
突然そんな宣言をすると、ノブ会長は顔をしかめた。

「正気かよ。明後日が議会なんだぞ。前日じゃねえか。」

あたしはすまして答える。

「受け持ちの仕事は全部今日で終わらせるから。それに明日は、特に打ち合わせもないでしょう？ここんところずっと居残りしてきたんだから、いいでしょう、1日くらい。」

ノブ会長はやれやれ、とため息をついた。

「藤原は一番働いてくれたわけだしな。……ま、いつか。

そのかわり、レジユメはちゃんと読んでおくこと。」

「ノブ会長のそういう話をわかってくれるところ、好きだなー。」

会長はうつとおしそうな顔でうるさい、と追い払うしぐさをした。けれどすぐ、興味津々は表情になる。

「で、藤原が無理やり休みとってまでいれたい予定って、何なんだ。」

「内緒。」

あたしは冷たく返した。ノブ会長が不満げな声をあげて抗議してくる。でも、悪いけどこれは黙秘させてもらう。

だって、本当に久しぶりなのだ。明日の授業後は前々からちゃんと、約束していた。絶対、意地でも空けないと。

久しぶりの、小野くんとの古典授業の日なのだから。

けれど、すごく楽しみにしていた予定ほど上手くいかないものだ。小野くんと古典特別授業は、始まって以来初めて、小野くんの事情により流れてしまった。

「本当にごめん、藤原さん。」

小野くんは、心から申し訳なさそうな表情で手を合わせた。

「急に、用事ができたんだ。どうしても外せなくて。約束していたのに、ごめん。」

全然かまわない。あたしは少し笑って首を降った。いつも、あたしの都合ばかりで日程を決めていたのだ。あたしはお願いしている身、本来は小野くんの都合こそ優先されるべきなんだ。文句や不満なんて、言えるはずがない。

「気にしないで。小野くんが忙しいなら仕方ないよ。」

「期末の前に、絶対に埋め合わせするから。また考えよう。」

「うん、ありがとう。またね。」

手を振って、教室を出て行く小野くんを見送った。

ゆるゆる息をはいて、あたしは小野くんの席に勝手に座った。残念、という思いで気分がしゅんと沈む。仕方のないことだけれど。

なんだか、本当に楽しみにしていたんだあと、自分で改めて思った。

古典の勉強は、大嫌いなはずなのに。

予定が流れてぼっかりと空いた時間、あたしは初めて一人だけの古典勉強をすることにした。ノブ会長に行かないときっぱり宣言をしてしまったから、生徒会室には行きづらい。それに、こんな時でなければ古典なんてやらないだろうとも思った。家に帰ったあとの時間は、数学や英語、物理化学の勉強にあててそっちに集中したい。腐っても、あたしは理系なのです。

放課後の教室内は早くもがらんとして、いるのはあたしだけだった。あたしは机の上に、文法書や教科書を出した。それにしても小野君の机は、男子のなのきれいに片付いているな。あたしも見習わなければならない。

よし、と気合いを入れて、あたしは早速プリントを広げた。

プリントに向かってから、どれくらいたった時だろう。

「藤原。」

いきなり呼ばれて、思わず体がびくと跳ねた。顔を上げると、すぐ近くにある廊下側の窓からこちらを見ているのは、新田くんだった。

「ど　どうかした？」

突然の彼の登場に驚いて、あたしはつばを飲み込んでからそう尋ねた。新田くんはひら、と手に持った紙を掲げて見せた。

「委員会の計画書、書き直したやつ持ってきた。……生徒会室に行ったら、今日は来てないって言われて、もう帰ったかと思ったけど。」

「……あ、ごめん。」

そうだった。新田くんは今日完成稿を持ってくる、と言っていた。探させてしまったなら、悪いことをしたな。

新田くんはちら、と教室内をうかがうように身をかがめた。

「入っても構わねえ？」

「うん、どうぞ。」

頷くと、新田くんは戸口へまわり、のそりとぐくって教室に入ってきた。あたしが座っている小野くんの席の、前の席をがたと引いてそこに座る。

「……………」

無言で紙を差し出され、あたしは勉強を中断してそれを受け取った。さらさらと目を通して、訂正箇所と大体の流れだけ確認する。

「うん、いいと思う。明日印刷して、議会で配るね。」

「ああ。……ぎりぎりになったな。悪い。」

「いいよ。まあ、間に合ったんだしね。」

苦笑してそう返したところで、話すことがもうなくなってしまった。

「……………」

どうしよう。妙な沈黙に、居心地が悪くて内心焦る。世間話や何てことない話は、結構すらすら出てくる方だと自分では思うのに。何も話題が思いつかなくて、あたしは視線をうろつろと泳がせた。けれど新田くんは、席を立とうとはしなかった。

変な感じだ。新田くんとうろついて近くで、向かい合っているなんて。なんだか、すごく久しぶりな気がする。昨日も会ったのだけだ。

ぎこちなく笑いかけると、新田くんの表情もわずかに硬さがとれた。気がした。

「……なんか、懐かしいね。」

ぼつりとそう言うと、新田くんも「……ああ。」と頷いた。純粹な同意。その反応に、昔の話題を出してもいいのだろうか、と少し勇気づけられる。

「中学以来、全然話さなかったし。……こうして話すのも久々だね。」

新田くんは少し顔をしかめた。

「確かに……中学ん時は、全然しゃべらなかった。」

「あたし、嫌われたんだと思っていたよ。」

冗談めかしてそんな本音を言うと、新田くんはますます苦い表情になった。

「そうじゃない。別に、嫌ったんじゃない。」

言葉を探すように、彼は首の後ろに手をまわして、乱暴にさすった。

「あの時は、よくわかんねえけど、幼なじみとか女友達とか、そういうのが嫌だったんだ。別に、藤原自体が嫌だったわけじゃない。く。」

新田くんはまるで、怒っているような顔でそう言った。

あたしはぼかんとしてしまっただけで、しだいに何故か、笑いがこみ上げてきた。慌てて手で口元を抑える。やばい、にやけてしまっうよ。

「……そうか、嫌われたんじゃなかったんだ。」

「……ああ。」

なんだ、そっかそっか。

じんわりと嬉しくなつて、あたしはうつむいて緩んでしまう頬を隠した。

嫌われたんじゃなかった。冷たくされたのは、そういう年頃だったとかの、やつぱり一時的なことだったんだ。つながりは絶えたわけじゃなかったんだ。

えへへ、とあたしは嬉しくて調子にのつた。

「じゃあ、また『ゆうくん』って呼んでもいい？」

とたんに新田くんは嫌そうな顔になった。

「その呼び方は、よしてくれ。……力が抜ける。」

あたしは笑った。確かに、立派な大男に育った彼に「ゆうくん」

はないだろう。その呼び名はもう、新田くんには似合わない。彼をそう呼ぶ人なんていない。あたしたちはもう小学生ではない。

でも、あたしはちよつとだけねばった。

「皆の前では呼ばないよ。誰もいない時にだけ、たまに。……駄目かな。」

こついつの、何て言うんだろ。……仲直り、ではないし。つまりあたしは、昔仲の良かった彼ともう一度仲良くなったんだ、というしるしが欲しいのだ。

新田くんはじつとあたしを見て何か考えているようだったけれど、

結局頷いた。

「わかった、別にそれでいい。なら、俺もたまに『朝子』って呼ぶことにする。」

「本当？」

あたしは少し身を乗り出した。それ、すごくいい。二人とも、昔みたいに呼び合えるなんて。

あたしがあんまり嬉しそうな顔をしていたからか、新田くんは眉根を寄せて、いぶかしむような顔をした。

「……つか、お前はそれでいいのかよ。」

「いいも何も、すごく嬉しいよ。」

新田くんはわからん、というように首をかしげた。そして仏頂面のまま、「……ふーん。」と曖昧なあいづちをうった。

新田くんがふと、机の上の古典プリントに目をとめた。

「何、古文やってたのか？」

「うん。」

あたしは苦笑しつつ、プリントをひらひら振ってみせた。

「古典の成績がかなりまずくって。ともえ先生に特別課題出されたの。」

「中間テスト、そんなに駄目だったのか。」

「……。」

触れて欲しくないところをつつかれて、あたしは黙りこんだ。図星だ。中間の古典は、平均点の半分に届いていない。つまり、赤いアレだ。

「……新田くんは、古典得意？」

逆に問い返してごまかすと、新田くんは興味深そうにプリントをしげしげと見つつ答えた。

「それほど得意ってわけじゃねえけど、それなりに。……たぶん、藤原よりはできると思う。」

失礼な奴だ。あたしは顔をしかめて、表情で彼に文句を言ってるんだ。

新田くんはそれを見て、ふっと笑っただけだったけれど。

「うるさいなあ。どうせあたしは古典はからっきしですよ。だからこうして勉強してるんじゃないか。それに、優秀な先生もついているんだから。」

あたしがむくれて言うと、意外にも新田くんは「そうらしいな。」と返してきた。

「小野、だっけ。」

びっくりした。

「知ってるの？」

思わず身を乗りだして聞くと、新田くんはいや、と首を降った。

「吉田から聞いたことがあるだけ。」

吉田 ノブ会長か。ということは、ノブ会長と小野くんは、知り合いなのかな。二人の顔を思い浮かべてみる。今度、小野くんに聞いてみよう。

新田くんが、ぽつりと尋ねてきた。

「どんな奴？」

「え、小野くん？」

あたしはきよんとした。

唐突にどんな奴、と言われても。あたしには一口では答えられない。あたしの知っている小野孝志くんは

「ええと、……古典が得意で、優しくて丁寧で、上達部みたいな人。」

はあ？と新田くんは眉を寄せて、怪訝そうな顔をした。

「何だ、その上達部って。」

へへへ、とあたしは笑ってごまかす。

「いや、小野くん、古典がすごくよくできるから。」

本当は、それだけじゃないけれど。尊敬できるくらい真面目でしっかりしていて、爽やかに笑った顔がすごく眩しいから、とは、さすがに言えない。

新田くんは呆れたように息をはいた。

「古典ができたなら、皆貴族なのか。」

「違うよ、小野くんだけ。」

小野くんだから上達部なのだ。同じく古典が得意な人がいたとしても、彼のようにには思わない。あたしはふんについて、新田くんになっと笑いかけた。

「例えばゆーくんだったらさ、あたしより古典ができるけど、上達部っぽくはないでしょ。」

どっちかっていうと、もののふ、って感じかな。」

「もののふ？」

「武人だよ、武士。ほら、資料集に書いてある。」

あたしは出してあった便覧をパラパラとめくって、絵巻物の一部が載ったページを開いた。馬に乗り、弓矢をかついだ男の人の絵だ。別に、新田くんが引目鉤鼻のような顔だちだと言いたいわけではない。もののふの図がこれしかなかったのだ。

新田くんは便覧の図を覗きこんで、やや嫌そうな表情になった。

絵の男の人が、太りすぎているからかもしれない。

「俺がこれで、小野が上達部で、……じゃあお前は？」

えっ、と一瞬虚をつかれた。彼が話に乗ってくれるとは思わなかったのだ。予想外の切り返しに、あたしはうーんとうなって頬をかきつつ、また便覧をめくった。

「あたしは、古典がまだまだ、全然駄目だから。……今は、こんなところかな。」

あたしが指で示したのは、古代の位階がずらりと並んだ表だった。小野くんの三位以上の上達部ははるか雲の上、あたしは表の一番下だ。「しょうそいのげ少初位下」と書いてある。まだ、駆け出しの下級役人。

新田くんがふーっと長く、脱力するように息をはいた。

「……お前、相変わらずだな。妄想癖というか、変なことばっか思いつくところ。」

相変わらず、って。

「え、あたしって昔から、変な空想とかしてた？」

「してた。小さい時にさんざん、俺は妙に細かい設定のごっこ遊びにつき合わされた。」

新田くんを、ごっこ遊びにつき合わせた？そんなこと、してただらうか。

「えー、そうだった？」

「お前な。俺は毎回、悪の組織だか何だかをやらされていたんだぞ。」

「うそだー。」

「うそじゃない。」

「本当に？」

「とび蹴りとかしたくせに、忘れたのかよ。」

全然覚えていない。あたしは無性におかしくておかしくて、声を上げて笑い出してしまった。それで新田くんが渋い表情になる。けれど、そんな彼の表情すらおかしかった。

笑いながら、嬉しさをかみしめる。

新田くんと、こうして他愛ない話ができること。彼とあたしは昔からの友達だったけれど、今日、もう一度友達になったのだ。もう絶対に無理だと思っていたけれど、関わりがなくなった原因は、本当は単純なことだった。あたしには、それが嬉しくて嬉しくて仕方なかった。

小野くんとのやり直し古典授業は、議会が無事に終わった次の週、7月が始まる週にすることになった。

学校内はテスト前特有の、ぴりぴりと落ち着かない雰囲気になっている。議会が終わってほっと一息、身軽になったあたしも、遅まきながらテスト勉強に本格的に身を入れ始めた。期末試験は特に、教科数が多くててんでこまいだ。範囲だって難易度だって、中間の時より増している。

正直なところ、本当は古典をやっている時間なんてない。でも、あたしは自分からこの特別授業をやめる気はなかった。もう必要ないなんて言わないと、約束したのだから。

「藤原さん、正解率上がったね。」

プリントの丸つけをしていた小野くんがふいに、感心したように言った。

「えっ、本当？」

誤答の見直しをしていたあたしは、それで勢いよく顔を上げた。そんなことを言われたのは、初めてだ。目を丸くするあたしに、小野くんが笑いかける。

「うん。簡単な識別問題とか、間違えなくなった。内容把握はもう少しだけど、現代語訳も前より自然になってきたし。」

「よっしゃあ！」

あたしはあまりかわいくない喜びの声を上げて、こぶしをぐっと高く伸ばした。あたしの古典力も少しは成長したんだ。あたしだって、やればできる子なんだ！

「嬉しい。実は最近、古典もちょっとおもしろいかも、って思い始めてたんだ。」

「うん。それ、すごくいいと思う。」

あたしと小野くんは顔を見合わせて、苦勞を分かち合った者同士の笑みを交わした。

「期末、いけるかな？」

「大丈夫だ。」

小野くんはこつくり頷いてくれる。彼のお墨付きをもらったら、あたしも心強い。中間テストよりは、期待できるかも。

小野くんが、ふうつと息をはいて言った。

「すごいな、藤原さんは。……理系で、しかも生徒会だって忙しかつただろうに、本当にちゃんと古典頑張ってるんだもんね。」

小野くんに褒められると、すごく照れくさい。感心してくれている彼こそが、あたしの古典に対するモチベーションの源泉なのだ。恥ずかしすぎて、そんなこと絶対に言えないけれど。

「いやいや、別に、そんなには忙しくなかったから。」

「でも、ノブが言ってたよ。先週まで議会があつて大変だったんだろ？」

ノブ会長から聞いたのか、とあたしは納得した。

「ああ、やっぱり小野くんって会長と友達なんだね。」

「うん、去年同じクラスでさ。たまに藤原さんのこととかも話すよ。」

あたしのこと？ぎよつとした。

「まさか、生徒会での失敗談とか……？」

おそろおそろ聞くと、小野くんは軽く笑った。

「それもあつたかも。あ、」

小野くんは急に真面目な表情になって、すつと姿勢を正した。

「そつえば、ノブから聞いたんだけど。藤原さん、この間議会の前日だったのに、この古文勉強会のために生徒会わざわざ休んだんだって？……なのに俺が流しちゃって、本当にごめんな。」

「え、いや、全然いいよ。」

あたしは慌てて、手を振って言った。小野くんは申し訳なく思ってくれるけれど、あれは仕方ないことだし、改めて謝ってもらうよ

うなことじゃない。それよりも、あたしは別のことで内心冷や汗をかいた。

会長に、バレている。あたしが生徒会を休んだ理由。

あたしの頭の中で、あの黒ぶち眼鏡がにやにや笑った。急いでその顔を追い払う。

「テスト前なのに今日こうやってもらえて、むしろあたしは大感謝だよ。」

下級役人がちよつとは出世したのも、小野くんのおかげ。」

小野くんはきよとした。

「え、役人？」

ああ、とあたしは苦笑した。あたしの変な空想のこと、小野くんにはそういえば話したことがなかった。くだらないことだけど、と断ってから説明する。

「小野くんが上達部だったら、古典の実力的には、あたしは下級役人だつてこと。変な思いつきだから、気にしないで。」

なるほど、と小野くんは苦笑した。そして、ふと思いついたように言う。

「でも、藤原さんなら役人よりは、女官とか姫が妥当じゃないか？」

まさか。あたしはぶんぶん首を振って否定した。

「姫だなんて、あたしには無理。柄じゃないっていうか、似合わないさすぎるよ。」

「そうかな。下級役人よりは、合つてると思うけど。」

小野くんは、思案するように首を傾けた。

「それに、似合わないなんて言ったら、俺だって上達部なんか無理だ。」

「え、小野くんは十分似合つてるよ。全然、無理じゃない。」

あたしが力をこめて反論すると、小野くんはさりと返した。

「それじゃ、藤原さんだって姫様でいいじゃないか。」

う、とつまるあたしに、小野くんは笑った。

あたしにはすごく眩しい、いつもの笑顔。

「藤原さんが姫やるんなら、俺も上達部やるよ。」

心が、ごとんと音をたててゆれた。

きゅん、だなんて、そんな生やさしいものじゃない。ぐつと揺さぶられるような。その衝撃と一緒に、あたしは自覚させられた。唐突に、はつきりと。

ああ、あたし小野くんが好きだなあ。

すんなりと、納得するようにそう思ったくせに、心臓の鼓動はいきなり速くなった。口では笑って小野くん言葉返しながら、明らかに赤くなっている自分でもわかる顔を、どうにか隠そうとプリントに集中するふりをする。当然、目が文面を上すべりするばかりで、内容なんて一文字も頭に入っていないけれど。

変に、汗をかいている気がする。暑くないか？ここの教室。

会話が終わって、小野くんも目をプリントに戻した。あたしはこっそり視線だけ上げて、その様子をうかがう。どうしよう。バカみたいに動揺しているのはあたしだけだ。あんな、何でもない言葉で小野くんは、静かな表情でプリントの文字を追っている。

彼が地味だなんて、頼子の目はおかしいとは思えない。目が合ったら、息をのむほどなのにな。少なくとも、あたしにとっては。

それから特別授業が終わるまでずっと、あたしはいきなり突き出たしまった気持ちをもてあまして、妙に緊張してすくすめになった。

ときどきしつばなしだった古典授業のあと、思いがけないことがもう一つあった。学校からの帰り、毎日利用する家からの最寄り駅で、新田くんとはったり会ったのだ。

「珍しい。」

お互いに言つて、あたしたちは笑った。

新田くんは野球部で、あたしは生徒会。どちらもおそくまで活動していることもあるけれど、意外と帰宅時間は重ならないのだ。二人とも利用する駅は一緒なのに、こうして帰りが同じ時間になったことは初めてだった。

「何、部活だったの？」

一緒に改札を出てから、あたしたちは自然に並んで歩き出した。

ご近所さん同士、帰る方向が同じだ。

「ああ。……期末直前だから、監督が早めに終わらせてくれたけどな。」

そういえば、まだ夕日の沈みきらないこの時間帯は、いつもの野球部が練習を終えるには少し早い。新田くんは、西日に目を眩しそうに細めた。これがものすごく睨んでいるように見えるから、彼は損なんだろうな。

「そっちは、今日も古典の勉強か？」

「うん。」

あたしはへへ、と笑って額をかいいた。

「最近ね、結構できるようになってきたんだよ。ちよつとずつ、おもしろみもわかってきたし。」

「へえ。」

新田くんが、ちらりとこちらを見た。あたしは得意になって言う。「古典つてさ、結構、言っていることに共感できる時があるんだよね。今の感覚と近いっていうか。特に恋の歌なんか、あーわかる、

って思うもん。」

そこまで言ってから、はっとした。しまった。恋、だなんてしゃべりすぎた。

今のあたしでは、過剰反応してしまう言葉だ。

一人でどぎまぎするあたしには気づかず、新田くんは前方を向いたまま、独り言のようにぽつりと言った。

「俺は、古典に共感は、したくない。」

あたしは、ぽかんと新田くんの横顔を見上げた。

「え、どうして？」

「百年も千年も前の人間と、考えることが同じなのは、何となく嫌だ。」

……自分が、まぬけに思える。」

それに、と彼は淡々と続けた。

「古典の恋の歌は、かなわないものが多いから。」

確かに、そうだ。

新田くんの意見はあたしとは違うけれど、すんなりと納得のいくものだった。

確かに、何百年も前の人々に共感できるなんて、人間って内面は全然進歩しないってことだ。そして古典の恋の歌は、忍ぶ恋、片想いが多い。別れたり疎遠になったり。恋の喜びを詠んだ歌は、少ないのだ。

ふと、この間勉強した古今集の一首が思い浮かんだ。なんとなく好きになって、覚えた歌。

紅の色にはいでし 隠れ沼の下にかよひて 恋は死ぬとも

(紀友則 古今 661)

初めて目にしたときに、恋が死ぬ、という表現が斬新に思えて、気に入ったのだった。けれど小野くんの解説によると、「恋は死ぬ」

とは「恋死ぬ」、つまり人を恋しく思うあまり死んでしまう、ということらしい。

間違った解釈から好きになった。それでも、この歌が心にひっかかるのは変わらない。たとえ死んでも、絶対に自分の恋を表に出さない、だなんて、なんて決意だろう。

どうして言わないのかな。プリントの助動詞識別問題を解いているときはわからなかったけど、今なら……少しだけ、わかる気がする。

片想い、かあ。

「……そうだね、確かに。おもしろみだけ感じるんじゃないもんね、共感しすぎると。」

その人の苦さまで味わってしまうのだ、自分の影を映して。その歌自体は、ずっと昔のことなのに。

何かずんと考えこんでしまいそうになったので、あたしは慌てて声を明るくした。

「まあ、下級役人にはまだまだ、古典の本当のおもしろみを理解するなんて、到底無理だけど。」

平安のお姫様じゃあるまいしね、とあたしがおどけて言うと、新田くんはふっと笑った。

「下級役人の方がいい。お姫様より。」

「……そうかなあ。」

あたしは内心少しだけ不満で、首を傾けた。

自分でも、似合っているのは下級役人の方だと思うけれど。でも何となく今は、そう人から言われたくなかった。

「お前が下級役人で、俺がもののふなんだろ。お前の妄想の中では。」

「……うん。」

それがどうしたんだろう、と思いつつも、あたしは頷いた。呆れられるばかりだと思っていただけで、新田くんは意外にも、あたし

の変な空想世界につき合ってくれる。昔したらしいごっこ遊びも、こんなふうだったのかもしれない。

「もののふは、宮中だとか都の警備をしているんだよな。」

「うん。」

そんなことが教科書に書いてあった気もする。

「役人は、毎朝自分の役所に出仕するわけだろ。」

「うん。」

「なら、毎日会える。」

あたしは、隣を歩く彼を見上げた。新田くんはいつもと変わらぬ愛想のない顔でこちらを見て、すぐにまた前方へ視線を戻した。

「役所の門前で警備とかしているんならな。……でも、お姫様じゃそうはいかないだろ。昔は、そういう人は外に出なかつたんだろ？」

「……なるほど。」

あたしはあごに手をあてて、うつむと感心した。新田くんの考え方って、なんか新鮮だ。あたしには思いつかないことで、そして筋が通っていて納得できる。しっかり独自の価値観をもっているんだな。

「……なんか、それもいいね。」

あたしはおもしろくなつて、くすくす笑った。下級役人でも、楽しい空想が広がる気がする。下級役人は朝早く出勤して、仕事場に着いたら仲のいいもののふにおはようと挨拶して、一日を始めるのだ。それって確かに、お姫様にはできない下級役人だけの楽しみだ。そんなバカな空想をしながら、あたしはふと思いついて、新田くんに尋ねた。ずっと疑問に思っていたことだ。

「ね、新田くんは何で美化委員になったの？」

もののふを連想させる強面な彼と、校内美化につとめるきれい好きの多い委員会とが、あたしにはどうしても繋がらないのだった。

新田くんはそれを聞くと、ぐっと渋い表情になった。

「……俺が美化委員で、何かおかしいか。」

「おかしいっていうか、……あんまりイメージにないから。」

気がつけば、夕日は沈んで空には光のすじだけが残っていた。まだまだ、十分明るくて夜には早い。あたしの家も目前で、到着まであと少しだ。そこであたしは、ふと何か引っかかりを覚えた。

「実は、掃除とか好きだった？」

「いや、別に。美化委員会に、特別入りたかったわけじゃない。」

「じゃんけんに負けた、とか？」

「違う。立候補した。」

何なんだ。よくわからなくて、あたしは首をかしげた。立候補したけど美化委員会に入りたかったわけじゃない？それって、どういうことだろう。

新田くんはあまりしゃべりたくなさそうな様子だったけれど、疑問符をたくさんくつつけたあたしの視線に押されたようだった。結局は、首の後ろをかきながら、ぼそつと早口で白状した。

「ただ少し、生徒会の近くに行けるんじゃないかって思ったんだ。」

そこで、あたしの家の前に到着した。足を止めたあたしは、さっきの引っかかりの正体にやっと気づいた。

そうだ、彼の家。あたしとご近所さんだけれど、新田くんの家は一つ違う通りにある。ここまで来てしまったら、いちいち引き返さなければならぬはずだ。

今さらになって驚いて、あたしは彼を見上げた。

わざわざ、送ってくれたのか。

「じゃあな。……試験頑張れよ、朝子。」

新田くんは相変わらぬのムスツとしているように見える顔で、それだけ言っただけで踵を返した。あたしと歩いていた時よりも速く、ずんずんその背は遠ざかる。あたしはやや呆然としながら、それを見送った。

ゆーくん、変わったな。

ふと、そう思った。新田くんは、もう小学生の時とも中学生の時とも、違う彼なのだ。体も大きくなって、声も低くなって、そしてたぶん、優しくなった。

何故だか胸がいっぱいになって、あたしはしばらくそのまま立ち尽くした。

懐かしいのか、嬉しいのか、少し寂しいのかわからない。ともかく何かで、息がつまるくらいいっぱいになった。

少し夜が濃くなったのに気づいて、あたしはゆっくりと我に返った。ふと空を見上げると、まだ少し明るい藍色の中に、星が一つだけ輝いていた。

7（後書き）

お読みくださり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3478m/>

古典の恋 その二

2010年10月8日12時32分発行